

## 末摘花に投影された作者紫式部

中島, あや子  
鹿児島大学法文学部講師

<https://doi.org/10.15017/12096>

---

出版情報 : 語文研究. 44/45, pp. 54-60, 1978-06-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 末摘花に投影された作者紫式部

中 島 あ や 子

巻巻における物語論は、言うなれば、源氏物語に向かう作者紫式部の姿勢を光源氏に代弁させたものとも一般に考えられているものであり、その主旨は、日本紀などの史書よりも上位にあるとまでいう作り物語の真实性にある。そうして、その虚構の物語の真实性を作品の内側から支えているものとしては、多くの人伝ての話や読書による知識もさることながら、何といても作者自身の現実体験とそれによって触発される日々の感懐の投入が、その中心的な要素となっていることは疑えないであらう。

右のような視点に立って、以前、式部の越前の旅という離京の体験が、源氏の須磨謫居の描出に影を落としていたことを述べたことがあるが、こうした視点は作中人物論にも深く関わってくるものがあり、これまでも源氏物語中の人物に作者紫式部像をみようとすると指摘がしばしばなされたゆえんである。

本稿では、そうした視点から見ても、従来比較的問題視されなかつた末摘花という人物をとりあげ、作者紫式部がいかに投影されているかについて再検討を試みたい。

はじめに、やや長文にわたるが、源氏物語と紫式部日記の記述の酷似する箇所を左に引用する。<sup>(注2)</sup>

### △源氏物語▽

(1) (はかなきふる歌・物語などやうのすまびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし、かゝるすまひをも) 思ひ慰むるわざなめれ。さ様のことに、心おそくて物し給ふ。(2) (わざと好ましからねど、おのづから、また氣ごとなき程は、おなじ心なる文通はしなごうちしてこそ、若き人は、木草につけても心を慰め給ふべけれど、親のもてかじつき給ひし御心おきてのまゝに世の(中を)「つゞまじき物」におほして、まれにも言通ひ給ふべき御あたりをも、さらに馴れ給はず。(1) (ふりにたる御厨子あけて、唐守・藝妓の刀目・かくや姫の物語の絵にも書きたるをぞ、時／＼のまさぐり物にし給ふ。古歌とても、をか

### △紫式部日記▽

(2) (見どころもなきふるさとの木立を見るにも、ものむつかしう思ひみだれて、年ごろのつれづれにながめあかし暮らして、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空の気色、月の影、霜雪を見て、そのとき空にけりとはかり思ひわきつつ、いかにやいかにとばかり、行くすゑの心ほそさはやるかたなきものから、はかなき物語などにつけてうち語らふ人、おなじ心なるは、あはれに書きかはし、すこしけどほきたよりどもを、たゞねでもいひけるを、ただこれをさまさまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをばなぐさめつつ、世にあるべき人かすとは思はずながら、さしあたりて、はづかしく、いみじと思ひしるかたばかりのがれた

しまやうに遷り出で、顔をも統人も、あらはし、心得たるこそ、見所もありけれ、うるはしき紙屋敷・障紙紙などのふくだめに、ふるごともの、目馴れたるなどは、折し、すさまじげなるを、せめてながめ給ふ折しは、引(き)ひろげ給ふ。」

(3)「今の、世の人のすめる、経うち読み、行ひなどいふことは、いと、恥づかしくし給ひて、見たてまつる人もなけれど、数珠など、とりよせ給はず、かやうに、うるはしく(せ)、物し給ひける。」(蓮生巻)

(2)「あまり、うたでもあるかな。さやうなる住ひする人は、物、おもひ知りたる気色、はかなき木草・空の気色につけても、取りなしなどして、心ばせ、おしはからるゝ、をりくあらむこそ、あはれなるへけれ。重しとも、いとかう、あまり埋もれたらんは、心づきなく、わるびたり」

(末摘花巻)

物語は蓮生巻が末摘花の住居の描写、末摘花巻が頭中将の末摘花評であり、日記は寛弘五年十一月某日に里居にある式部の感懐と、今一つはいわゆる消息文中の記述の一部である。物語、日記両者の記述が近似することは早く島津久基氏が触れて、「あの御化け屋敷の末摘花の住居が、全然紫女の空想からのみ出たのではなくて、意外にも実は作者自身の体験とその住居がその主要な素材であるなどは、頗る興味ある事と言わねばならぬ」と結論づけ、続いて、この両者が影響関係にあることから、いわゆる玉鬘系である末摘花・蓬生両巻は日記の記事の寛弘五年以降に成ったとして、後期挿入説の証左としておられる。(注)氏の説の前半は首肯できるが、それ

りしを、さも羨せることなく思ひしる身のうさかな。」(十一月某日の条)

(1)「大きな厨子一よろひに、ひまもなく積みて侍るもの、ひとつにはふる歌、物語のえもいはず蟲の巢になりにたる、むつかしくはひちれば、あけて見る人も侍らず」

(中略) (3)「よろづつれづれなる人の、まざることなきままに、古き反古ひきさがし、行ひがちに、口ひひらかし、数珠の音高きなど、いと心づきなく見ゆるわざなりと思ひ給へて、心にまかせつべきことをさへ、わがつかふ人の目にはばかり、心に」

(消息文)

をすぐに玉鬘系後期挿入説に導かれる後半には疑問がある。日記の記述が必ずしも物語の描写に先行するものとは決ま難く、末摘花の住居の描写が先にあり、後、日記に同じような住居のさまを記述する時、物語のそれを材料としたものと考ええることは無理ではないであろう。訪れる人とてめったにない蓬屋に、とりとめもないことに気をまぎらわしつづ日を送る佻しい生活は、式部にとつて、日記を書く後年になってから始まったものではなく、早く、夫直孝をなくし寡婦になって以来続いていることは家集によつても知られるところである。夫をなくした昔から変わることのない住居のさまを、後年日記に記述する時、以前に年若い頃の自身の生活を素材として投入した物語の末摘花の生活描写に材料を得たものと考えるところも可能であろう。とすれば、物語、日記両者の類似の関係をすぐに玉鬘系後期挿入説の証左の一つとするわけにはいかない。問題は、そうした影響の先後関係を越えて、字句にまで及んで両者が似通うことの意味の検討にあると思われる。

各々類似する本文箇所我便宜上、(1)(2)(3)の番号を付して「」でくくり、両者共通する字句に傍線を付して、これを整理すると、つれづれなる住居する人は、自らの心を慰めるよすがとして、

(1)古くなつた厨子から古歌・物語などを出して読む。  
(2)四季に移り変わる空の気色や、木草花鳥など、とりとめもないことにつけても、同じように所在なく日を通す人と互いに文を通わし、語り合う。

(3)数珠をとりよせ、経を読んで、動行をする。  
となる。夫々の項目について本文に即して細かく見ていく。  
(1)について、日記の文章は、蟲の巢になつてゐる古歌・物語をあ

けてみようともしないことをいっているが、消息文を書く頃の式部は、かなり老いを意識しつつあり、そのために、そうした気のまぎらせ方さえも儼然と感じられる気持ちのまま日を過していったものと考えられる。が、自らの心を慰めるために、今も古歌・物語を常に手元に置いており、この生活習慣は年若い頃から続いているもので、それが後に源氏物語を創作するために必要な知識の一端となっているであろうことは容易に想像できよう。末摘花の場合は、こうした行為がかえて古体の「唐衣」の歌しか詠めない、かたくなな、髓脳本位の和歌の発想の原因ともなっているが、これは式部自身の体験から、そうした弊害のありがちなことを物語の末摘花の所業として描いたものと考えられよう。が、こうした心慰める方法も積極的にしようとはしない末摘花を描出していることは注目される。

次に(2)については、似通った記述が、今一つ、早蕨巻冒頭部分にある。

行きかふ時／＼に従ひ、花・鳥の色をも音をも、おなじ心に、

おき臥し見つゝ、はかなき事をも、本末をとりに言ひかはし、

心細き、世の憂さもつらさも、うち語らひ合はせ聞えしにこ

そ、なぐさむ方もありしか。

父八宮の死後、世の憂さを同じ心に感じ入りながらも、日々とりとめもないことを互いに語り合うことで、何とか心を慰め合っていた姉がもはやこの世にいないことを悲嘆する中君を描いたものである。日記にみえる、人数でない我が身の憂さを、そうした行為をすることで、さしあたっては思いのがれようとする、式部の消極的な意味での生活信条といえるものが、中君のそれに投じられたものであろう。が、そうした心に痛みを持っている者がする最も一般的な

気のまぎらせ方さえもあえてしようとはしない人物が、作者紫式部の描く末摘花である。自分のやった消息に対して返事もしない末摘花に対する頭中将の批評は、零落して世の憂わしさを思い知ったであろう今にあっても、なお以前のお姫様育ちそのままに、世間知らずで、いわば弱みを見せない末摘花に対する非難である。

(3)に移ると、一般的に今の世の世の人が気をまぎらせようと心にまかせてする動行までも、つましき身も思つて、人の目をはばかりおしつゝむところは両者同趣である。式部が出家を志向しながらも、それを躊躇していたことは左の日記の記述等により、しばしば指摘されるところである。

ただひたみにそむきても、雲にのらぬほどのたゆたふべきやうなむけるべかなる。それにやすらひ侍るなり。年もはたよきほどになりもてまかる。いたうこれより老いほれて、はためくらうて経よまず、心もいとどたゆさまさまり侍らむものを。心深き人まねのやうに侍れど、いまはたゞ、かかるかたのことをぞ思ひ給ふる、それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひ侍らじ。

無論、末摘花の場合は、式部のこうした動行の迷いの域にあるものではなく、お姫様育ちの古風さがそのままに、ただひたすら世の中をつつましく思う性格からきているのではあるが、物語と日記の記述が酷似することは、少なくとも、式部の生活風景・感情の一端を末摘花に移し入れようとしたものと考えることができよう。

ここで、前節について検討する手がかりとして、源氏物語全体に描かれているつれづれ人が、どのようにして自らの心を慰めているかについて、具体的な例をあげて整理してみたい。

(A) 和歌、物語、楽器、碁など、はかなき遊びにうち興じる。

\* (兼氏) いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をし給ふ。珍しきまなる唐の綾などに、さま／＼の絵どもを、書きすさみ給へる、屏風のおもてどもなど、いとめでたく見所あり。(須磨)

\* (八宮) 雅楽寮の、物の師どもなどやうの、すぐれたるを、召し寄せつゝ、はかなき遊びに心を入れ、生ひ出で給へれば

(権姫)

\* (兼氏) 碁うち、扁附などしつゝ、日を暮らし給ふに(兼)

(B) 草花など自然の景物をながめて心を慰める。

\* 所／＼につけたる花・紅葉の、色をも香をも、(中君は大君とおなじ心に、見はやし給ひしにこそ、なぐさむことも多けれ。(権姫)

(C) 気持ちの通じ合う相手と互いに文を通わし、語り合う。

\* (兼) 「つれ／＼とのみ過ぐし侍る世の物語も、きこえさせどころに頼み聞えさせ、又、(大君) かく、世離れて眺めさせ給ふらむ、御心の粉らはしにも、さしも驚かせ給ふばかり、きこえ馴れ侍らば、いかに思ふさまに侍らん」(権姫)

(D) 子供を養育、後見することで気をまぎらわす。

\* (明石) 「(明石姫君) 手をはなち、うしろめたからんこと、つれ／＼も慰む方なくては、いかゞ、明かし暮らすべからむ」(薄雲)

「らむ」(薄雲)

(E) 動行に心を入れる。

\* 風の音さへ、たゞならずなりゆく頃しも、(兼氏) 御法のいとなみにて、朔日ごろは、まぎらはしげなり。(匂)

以上、五項目にまとめてみたが、他に、つれづれの慰めに男が女のもとに通う例が頻繁にみられることは言うまでもない。そこで、この(A)～(E)の五項目と前節の(1)～(3)の三項目とを比べると、

(1)が(A)に、(2)が(B)と(C)に、(3)が(E)に夫々相当し、

(D)の子供の養育、後見のほかは、第一節でみたつれづれ人の生活描写の要素とはば一致する。ということとは、第一節でみた生活風景はつれづれ人のそれとして極めて一般的なもので、そうした要素が凝縮した形で記述されたものと考えてよからう。少なくとも、源氏物語作者紫式部においてはそのように自覚されていたとしてよさそうである。とすれば、そうした物思わしい日々を所在なく過す人の一般的な生活ぶりが、字句の一致をとらなつて、凝縮された形で、末摘花・蓬生両巻、紫式部日記夫々の記述に符合度が高いことの意味をあらためて検討する必要がある。

そこで再び第一節に挙げた末摘花の生活描写をみると、(1)和歌・物語などのはかなき遊びをする、(2)季節の移り変わりなどとりとめもないことにつけても、気持ちの通じ合う人と文を通わし語り合う、(3)動行をする、という記述が日記の字句とはば一致する心慰めの方法を提示しつつ、それを一一否定していることが注目される。

## 三

末摘花巻は、日本の物語の習慣として色好みの男のをこな物語を

作者が書いたものであることは疑うべくもないが、蓬生巻への変貌についてはしばしば問題になる。「俗物的現実と、これと全く異った非現実的人間との対照の滑稽であ」り、末摘花の「白痴的な頑固さ」「愚かさ」を御指摘になる今井源衛先生等の立場と、一方、蓬生巻の末摘花像にある達成を見ようとする立場とに大別される。後者の立場のうち、末摘花巻と蓬生巻との両巻における末摘花の描かれ方の違いを、物語の主題性の要請という観点から説かれた森一郎氏の御指摘は示唆に富んだものである。そこで氏説を要約する。

末摘花巻の末摘花造型は、「帚木にはじまる中の品の女性遍歴の一環を彩らず女主人公の物語という構想の中から生まれたもの」であるが、蓬生巻では、欠点を嘲笑の対象とする描かれ方ではなく、「朴念仁の美質とでもいうべきものが描かれて」おり、「環境の変化にみづれず、あくまで昔風の姫君としての生き方を保守する末摘花は、高貴な貴族精神の典型と称すべきものがある」が、これは、「源氏の須磨退居の折に見せた人々の心、それに対する源氏の対応という物語の構想の必然性の中で蓬生一巻が構想され、誠実さを讃美する主題において、末摘花が女主人公としてその唯一最上の美質を讃美されたのである。」なお、両巻の造型の違いを末摘花の成長と考えることは、蓬生巻以後の巻々で再び嘲笑の対象となっていることをみると無理である。このように、末摘花・蓬生両巻の構想、主題が全然別個であるところに、「同一人物の性格への照明の当て方が違ってきた」と御指摘になっている。

前述の、蓬生巻と紫式部日記との記述の類似は、森氏のこうした視点の中に位置づけられるものと考ええる。蓬生巻の前巻の記述は、零落した今となっても、なお世間のつれづれ人がする心慰めもあえ

てしようとせず、ひたすら古風で一徹な姫君気質を変えようとしないう末摘花の生活描写であるが、これに対し作者は、「さ様のことにも、心おそくて物し給ふ」「親のもてかしつき給ひし御心おきてのまゝに、世の中を、「つゝまじき物」におぼして、まれにも言通ひ給ふべき御あたりをも、さらに馴れ給はず」「かやうに、うるはしくぞ、物し給ひける」と批評するが、これは前巻の頭中將の末摘花評等、末摘花巻において人々の口を通して述べられる非難とは比べようもなく好意的である。

源氏物語作者紫式部は、こうした守旧的態度を必ずしも讃美しない。末摘花巻、あるいは蓬生巻以後の巻々に描かれる末摘花を含めて、時代に適應できない愚かな人間に対する嘲りが目立つ。作者は、やはり、世の中に対し聡明な判断ができ、平衡のとれた思考をする人物を賞讃している。しかし、一方、式部は、

身をおもはずなりとなげくことの、やうくなのめに、  
ひたふるのさまなるをおもひける

(54) かすならぬこゝろに身をまかせねと  
身にしたかふは心なりけり

(55) こゝろたにいかなる身にかゝなふらむ  
おもひしれともおもひしられず

という紫式部集収載歌にもみられるように、自身の期待する「心」とは異って、現在ある環境に置かれた我が「身」相應に生きることが余儀なくされる世の中を諦めつつも、なお良しとし難い気持ち、夫宣孝没後、寡婦生活、官仕時代を通じて持ち続けていたことは大方が認めるところである。こうした守旧的な精神が、表面はすぐよかにあらうとする式部の奥深い部分にあったことも又事実であ

(注7)

森氏の御指摘になるように、物語の主題性の要請として、蓬生巻における末摘花の古風な生き方が美質として賞讃される必然性が生じ、そこに作者自身の深いところにあった守旧的な精神が投影したことの結果が、蓬生巻と紫式部日記両者の記述の類似であると考えられる。

源氏物語の中で、頑固な古風さを特に是認しない作者が、蓬生巻一卷の末摘花造型については、それを非難せず、自身の生活風景の投入をもしていることは、以上の理由によるものと考ええる。

#### 四

式部は、末摘花に自身を投入するにあたって、右のような屈折した方法のほかに、極めて素直に自身を移し入れている箇所が一、二ある。その一は、末摘花巻の源氏の後朝の歌で、その夜訪問できないことを告げる、「夕霧のはるゝ気色もまだ見ぬにいぶせさ添ふるよひの雨かな」に返した末摘花歌

はれぬ夜の月待つ里をおもひやれ

同じ心にながめせずとも

が、紫式部集収載歌中の式部歌、

又、おなしすち、九月まあかき夜

(94) おほかたのおきのあはれを思ひやれ

月にこゝろはあくかれぬとも

を材料としたものと考えられる。両者が影響関係にあることは既に今井源衛先生が指摘されている。<sup>(注8)</sup> 家集のこの歌は、前歌(92)「いゝるかたは」(93)「さしてゆく」とともに一つの歌群をなし、新婚の

頃を過ぎ、だんだんと夫宣孝の夜がれが目立ち始め、それを諦めつつある心で日を過ごしていた長保二年秋頃の式部が、夫の夜がれを弱々しくも難詰した詠歌である。なお、この歌は、初出仕の折の詠歌(56)以降、家集後半の宮仕時代の歌群の中にあり、錯簡かあるいは意識的に年代順配列を変えたものかの論議があり、筆者は後者の立場に賛同するものであるが、<sup>(注9)</sup> 歌そのものの詠歌年時・事情には特に問題はないようである。

両者は「月」の比喩が、末摘花歌では相手の男(光源氏)、家集では男(宣孝)が通って行く相手の女と、そのたとえ方に違いがあるものの、第三句「おもひやれ」、結句「——とも」という修辞上の一致をともなつて、自分のもとに訪れてこない男に対して、諦めつつもなお懇望する女の心痛を訴えた歌であるところは同趣である。一方が後朝の歌、他方が夫の夜がれのつれづれに慣らされ始めた頃の歌との相違はみられるが、夫にかえりみられない妻の心情としては、そうした状況の違いを超えて相通するものがあり、それが要因となつて、旧作(94)歌が物語の末摘花歌に素材を与えたものといえよう。

今一つは、蓬生巻の歌で、須磨から帰京後も久しく訪れない源氏をひたすら待ち続ける末摘花邸にやと訪れた折の源氏歌「藤波のうち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ」に対して、詰って返した末摘花歌、

年を経てまつしるしなき我(が)宿を

花のたよりにすぎぬばかりか

が、同じく家集収載歌中の式部歌、

(79) たかさともとひもやくるとほとゝきす

こゝろのかきりまちそわひにし

を素材としたものようである。この両者の影響の関係については、以前述べたことがあるが、要約すると、(79) 歌については諸説あるが、卑見によれば、歌をやった相手は夫宣孝で、長保二年夏頃、夫の夜がれに慣らされ始めた頃、それを難詰した式部の詠歌と考えられ、詠歌事情は末摘花歌のそれと趣を一にする。式部と状況は異なるが、末摘花の場合も夫の久しい夜がれであることには変わりがない。又、(79) 歌は、古今集・恋四・七一〇・不知の、

たが里によがれをしてか時鳥

唯こゝにしもねたる声する

を本歌として詠まれたものであろうが、末摘花歌との間には、花のもとに訪れる鳥に、女と男の寓意のあることが共通する。家集の「たかさとともとひもやくる」と「まちそわひにし」の結びつきが、物語の「まつしるしなき」と「我(が)宿を花のたよりにすぎぬばかりか」の如く上下句転換した形で用語の対応関係がみとめられる。これも前例と同様に、自身の苦い体験を末摘花に移したものとみてさしつかえあるまい。末摘花に式部自身を移し入れたこの二例は、いづれも夫の夜がれのつれづれを嘆息する妻の心境を吐露したものである。第一・二・三節で検討したように、終始かわることのないつれづれなる作者自身の生活風景を屈折した形で投影させた末摘花という人物は、又、夫の夜がれが原因するつれづれなる思いを素直に投入するに値する対象であったといえよう。

以上、源氏物語・紫式部日記・紫式部集という、紫式部の三作品を通して、従来、源内侍・近江君とともに、をこの要素が濃く、式

部像とはむしろ対立するものとしてとらえられてきた感の強い末摘花という人物が、意外にその造型の深いところに式部自身が投影されていること、一端を指摘できるように思う。作者の体験、それにまつわる感懐が屈折した形であれ、このように投げられることは、物語に真实性を賦与するものであろうことは言うまでもない。

注

- (1) 拙稿「紫式部の越前の旅と須磨巻」(『語文研究』43号、昭52・6)
- (2) 源氏物語、紫式部日記ともに、本文は日本古典文学大系による。以下同。
- (3) 「対訳源氏物語講話(末摘花巻)」・「源氏物語新考」
- (4) 今井源衛「末摘花の問題」(『日本文学』昭30・9)、林田孝和「末摘花物語の『笑い』の形成」(『国学院雑誌』昭43・12、昭44・1)
- (5) 西郷信綱「日本古代文学史」、野村精一「末摘花から近江君へ——源氏物語における『笑い』」(『日本文学』昭33・2)、「源氏物語の創造」所収、森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」(『国語国文』昭40・4)、「源氏物語の方法」所収、大朝雄二「蓬生巻試論——源氏物語・並ひの巻に関する覚え書」(『日本文学』昭43・6)
- (6) 紫式部集本文は一類本の最善本とされる実践女子大本(『私家集大成・中古』)による。
- (7) 紫式部の守旧の姿勢については、早く吉川理吉氏(「紫式部について」(附)日記の本について再説)、「国語国文」昭15・4)による指摘がある。
- (8) 「源氏物語と紫式部集」(『王朝文学の研究』所収)
- (9) 拙稿「紫式部集所載歌の詠作年代について」(『語文研究』38号、昭50・1)
- (10) 同右